

ある父親

【親はやはり子どもがかわいい。いくつになってもかわいい。その気持ちを理解できるようになると、親の見方が変わる。】

先日、前任校の父母の方々と話をする機会があった。

あるお父さんが私に

「先生、先生の話でとっても気に入ってるのがあって、ここにこうしてメモをしてあるんだぜ。」

と言う。

「何ですか？それは。」

と聞くと、メモ帳を取り出して探し始めた。しばらく捜しておられたが、やっと探し当てたようで読み始めたが、

「先生、眼鏡がないと読めないから、ちょっと読んでみてくれ。」

と言う。メモ帳には、こう書いてあった。

『本当に強いヤツというのは、自分の守るべき大切なものを持っている人だ。その大切なものというのは、夢でもいいし、信念でもいい。友達でもいいし、愛する人でもいい。守るべき自分の大切なものを早く見つけることだ。』

確かに言った。たぶん卒業式の後教室で生徒に言った言葉だ。それを後ろで聞いておられたこの父親は、メモしたのだ。ありがたいことである。

F君の父親である。F君は色々私を悩ませた生徒である。そんなに悪いことをするわけではないのだが、いつまでたっても幼稚で、勉強もほとんどしない。父親も母親も3年生になってからは、気が気ではない。小学校時代に病気をし、入退院を繰り返したF君であるので、ついつい両親とも甘やかして育ててしまったようだ。中学校になり、体は丈夫になったが、精神的には幼く、大きな赤ちゃんみたいなもんだ。学級では友達にちょっかいを出しては喧嘩し、最後は自分が泣く。3年生になり、周りも認めるほど落ち着いてきた。困るのは勉強だ。じっとしていることが苦手なので、机に向かって勉強をする習慣がほとんどない。そして、両親も、本人も進学希望。母親はあまり学校に来ることはなく、懇談会などほとんど父親が来た。勉強しろ、と言っても全然しないことや、母親が甘やかし過ぎ、自分が怒っても母親がすぐにかばうので困るなどと、愚痴をこぼしていく。甘やかしているのは両親同じようなもんだ、と私は内心想いながら、父親の愚痴をいつも聞いていた。さんざん私に愚痴をこぼし、それでは足りないのか帰りには校長先生に

愚痴っていく。憎めない父親だ。

懇談会で私は父親にある私立高校を紹介し、本人と父親と私と3人でその高校を見学に行った。見学には母親が行くと聞いていたのだが、「大事なときはやはり俺が行かなきゃあ。」となる。父親も本人もその高校がずいぶん気に入ったようで、後入試まで2ヶ月ほどだが頑張ろう、と言うことになった。

願書が締め切られ、志願者数が新聞に発表になった。予想に反してずいぶん定員をオーバーしている。私は心配になった。一番心配なのは両親だ。志願者数が新聞に発表された朝一番に父親が学校にとんできた。とにかく頑張るしかない、と私は父親を落ち着かせた。そして校長室先生にさんざんしゃべって帰って行った。当のF君と来たら、そんなことはお構いなしにいつものように元気いっばいだ。

発表の日。さすがにF君も心配なようだ。私だって朝から仕事が手に着かない。9時頃、校長先生から内線が入った。F君合格！ ほっとした。しばらくすると、廊下を走る音が聞こえる。なんとF君の父親が駆けつけてきたのだ。わざわざ理科準備室まで。理科準備室に入るなり、父親は泣き出した。よほど嬉しかったのだろう。そして私の手を取り

「先生のおかげだ。ありがとうございました……。」

と言う。

「おめでとうございます。よかったね。本人が頑張ったからですよ。」

私にはそれしか言えない。20年近く中学校の教員をし、卒業生も7回目なのだが、高校に合格してこんなに喜んでもらったのは初めてだ。

この父親にとって、守るべき大切なものは子どもなのである。それが過ぎてしまった面は否めないが、純粹な気持ちであることだけは確かだった。だが、そろそろこの父親も母親も子離れをしなくてはいけない。そのことを父親は多少わかっているようだが、なかなかできないでいる。

F君は元気に高校生活を送っているようだ。

少し遠い学校なので心配したが、よかった。先日前任校のある先生に聞いたら、F君が学校に来て、もう一度武田先生に怒られたい、と言ってたそうだ。可愛くなってしまう。